

## 漢賦と漢字

高 橋 庸 一 郎

### 一 文字の初め

漢字は殷代の所謂甲骨文字から始まるというのが一般的理解ではある。しかし漢字の発生を仔細に追っていくと必ずしも、甲骨文字が最も古い訳ではない。甲骨文字の前には実は「陶片文字」や「獣骨文字」と称していろいろな文字があつたのである。例えば西安の半坡で出土した仰韶文化に属する彩陶に彫られた刻線は単なる模様ではなく、何らかの意を含んだ原初的な文字に類するものであると思われる。また一九五〇年に安陽の四盤磨で発見された獣骨に刻された文字様のものは、明らかに文字であろうし、また殷周青銅器銘文の末尾などにも、これとよく似た幾何学模様状の文字らしきものが入っているのが確認されているが、これは甲骨文字以前の文字の名残であろうかと思われる。しかし実際にはこれ等の、甲骨文字以前のものであると思われる文字が実際に文字として書き手の意図なり、意志なりを何処まで伝えることが出

来たのか、つまりそれらが何処まで所謂「文字性」を持っていたかと謂う点は甚だ疑問が多い。

### 二 「冊」字について

郭沫若はかつて『尚書・多士』に、「惟殷先人有冊有典」とあるのについて、

「甲骨文中にも冊の字もあるし典の字もある。まさしくこれ等は、書簡を集めた象形文字である。ただしこれ等の木簡や竹簡によつて編纂された典冊は地下に三千年以上埋蔵されていることになるから、恐らく再び地上に姿を現すことは不可能であろう。」と述べている。確かに『説文解字』には、

「冊符命也、諸侯進受於王也、象其札、一長一短中有二編之形（冊は符命なり、諸侯進みて王より受けるなり、其の札を象どる、一は長く一は短く、中に二編の形あり）」

とあって、いかにも冊簡に通じるという説解である。また『尚書・金縢』に、「史乃冊祝曰」と有り、その鄭玄注に、「史爲冊書祝辭也（史は冊を爲り、祝辭を書すなり）」又「冊、謂簡書也（冊は、簡書を謂ふなり）」

とある。しかしこのような『説文』の字解には近年多くの異論が出ている。例えば馬叙倫の『説金器刻詞』では、

「冊非書冊、乃冊也（冊は書冊に非ず、乃ち冊なり）」

としているし、康殷の『文字源流淺説』では、

「由古図形字形中多有豕、鳥、豆、肉等以祭於冊之形、因疑冊的初形概象古人所祭祀的「列石」之形、是示、土之外的另一種「靈石」。……其字形之所以作、估計可能當時在石腰部分有繩索彩帛之類纏束。（古い図形によると字形の中に多くの場合豚、鳥、豆、肉等があつて冊の形に祭つており、よつて冊の始めの形は恐らく古人が祭るところの「列石」の形を象つた者であり、これは、その場所の外の一種の「靈石」を示したものであろう。）」

と述べている。また董作賓は、

「冊字最初所象之形非簡非札、實爲龜版。（冊字の最初の象する所の形は簡に非ず札に非ず、實は亀版爲り）」

としている。つまり「冊」は簡を縄で繋いだ象形ではないというのである。祭祀用の所謂家畜や、動物を取り囲い込んでおく冊囲いのようなものを象形したものか、亀版を束ねたものであると謂うのである。こうして見てくると、竹簡や木簡が登場してくる時代ならともかく、甲骨文字以前の時代に既に策簡の束としての「冊」が有つたとは思えない。

### 三 「典」字について

また「典」は『説文』に、

「五帝之書也、从冊在丌上尊閣之也、莊都説典大冊也、（五帝の書なり、冊に从ひて丌の上に在らしむるは之を尊びて閣するなり、莊都の説は、典は大冊なりと）」

とある。この段注は、

「閣猶架也以丌賡閣之也（閣は猶ほ架のごときなり、丌賡を以て之を閣くなり）」

としている。なるほど「典」では確かに、几（机「つくえ」の原字）のように見えるが、甲骨文字をよく見ると、「丌」とされている部分は両の手で何かを捧げ持っている形象か、両手で支えている形である。几上に簡書を積み上げた形ではない。それでは本来「冊」「典」とは何を意味していたか、ということになるが、今のところ解明はされていない。ただいえることは、甲骨による

占卜を行っていた時代、つまり殷代には、簡書に当たるようなものは無かったし、それらを机の上に積み上げて、どこかに保管したり、誰か上位の人に差し上げるといふようなこともありえなかったはずであるということであろう。ただこの字は後に装飾化されて、両手の間の部分や片手の部分に二本の線がおかれるようになったり、或いは金文『格伯彝』等になると、それが全体として上部に反り返った線と、その下に八の字形の支え棒のようなものが付けられて、それがあたかも「几」字、つまりつくえ「机」字のように見えるものも出てくるのである。いずれにしても甲骨文字の時代には、「冊」、「典」、でイメージされるような今言うところの簡書に当たるものはまだ存在しなかったことは確かである。

#### 四 初期の漢字の性格

つまり殷代に於いては、貞人が専ら占卜に用いる道具としての文字は存在していたが、其れを記録するために用いるものとしての文字はまだ無かったのである。

文字が記録の為に使われるようになったのはほぼ周代になってからである。つまり青銅器にかかれた事象は明らかに記録であつて、占いやその他の目的によるのではない。青銅器に鑄込まれた文字の内容はいろいろあるが、主には策命記念及び、其の記念としての青銅器製作由来記であり、また土地境界画定覚書のようなものもある。いずれにしる青銅器の銘文の場合は「鑄込」んで、其れを末永く残すという目的を果たすために、当時としては決して容易には手に入らない相当高価な青銅原料と相当長い準備と労

力を必要としたのであるから、其れは並々ならぬ政治力、資力を要したことは間違いない。其の意味では、青銅器銘文というのは当時としては最高の芸術性をもった文学的記録であつた。しかし一方では、当時使われた漢字はそれほど一般の人々の間に通用していたものではない。何故なら其の前の甲骨文字はただかたかな、或いは王をはじめとする貞人の周りに集まった人々にのみ理解できるもので、其れ以外の人々にとつては、無縁のものであつたに違いない。殷が商丘に都を置いていた時代に、周原岐山の麓には已に古公亶父が周を拓いていたのであるが、周はまだ文字を持つていなかったのである。周が文字を手に入れたのは殷の最後の王帝辛の圧政を嫌つて、多くの貞人たちが殷を逃げ出し、周に入るようになってからである。恐らく其れは『竹書紀年』に言う、帝辛四年、「作炮烙之刑」の頃から已に始まっていたに違いない。

結局文字は殷では王と貞人周辺、周ではもう少しその範囲は広がつて、王侯貴族を中心とした、権力と資力ある者達のみが文字の恩恵を享受することが出来たのであろう。春秋戦国期には北方では多くの思想家や軍師が、また南方では巫覡や歌謡伝承家たちが活躍していたが、彼らは主に口頭で自らの思想や感情、歌謡説話伝承を語つたのであろう。其の後それらが孔子家の壁中ばかりでなく、魏襄王墓や現代になつてからも馬王堆や銀雀山、睡虎地などからの発掘文献として多く残つているところを見ると、それらを語つた人々の周りには、それらの人々自身をも含めて、それらを筆記記録できる幅広い層の人々が存在していたことを想定することが出来る。

こうした文字、其れは取りも直さず漢字であるが、其れを使う

ことの出来た人々が多くいたことを理解するためには、古代中国における字書字典の類の作成状況を見ればある程度は想像することが出来るであろう。しかし残念なことに、後漢許叔重の『説文解字』以前の字典は、その幾つかの名前ぐらいで内容に関してはほとんど残っていない。

殷代に作られた甲骨文字が一体どれくらいの数あったのかは勿論はつきりとは分らないが、中国科学院考古研究所が一九六四年に中華書局から出版した『甲骨文編』には、「此の書正編と付録で収録している字数は合計で四千六百七十二字であり、中には同じ字ではあるが字体が異なるので別字として採っているものもいくつかある。今のところ甲骨刻字の中で判別できる字は単字総数で、全部で約四千五百字、其中で弁別識別できるのは九百余字である。しかしこれまでに弁別識別できていたのは五六百字であつたから、この間に相当増えたことになる。」と記されている。此の書が刊行されたのが一九六四年で、それからかれこれ半世紀近く経っているから、それから言うに幾つかの文字は新たに発見され、解説もされたであろうが、甲骨文字の研究が大いに進んだのは大体一九六〇年代までであるから、現在でも『甲骨文編』が収録し、識別した字数が現在といえどもそんなに大きく変わっているということはないであろう。何故なら一九八八年に四川省辞書出版社が出版発行した『甲骨文字典』の主編者徐中舒も、その序文の中で、

「ここ九十年來、多くの学者達が総ての甲骨文字の中から四千字余りのそれぞれ異なつた形の符号である文字を整理して抽出したのであつた。更に研究と考察を経て、そしてそれらの中から後

世の漢字に繋がりを持つと識別確定できるもの一千字余りを取り出したのである。これ以外の文字の三分の二は、多くが地名人名等の固有名詞であるので、甲骨卜辞を解読するのにはそれほど障害になるものではない。」

と述べているからである。

さて次に、今までに発見された金文であるが、勿論その数は甲骨文字同様はつきりしているわけではない。しかし大凡の次第は、今までに出された研究者たちの考察に随つて考えることが出来るよう。中華民国二十七年九月の序文を持つ容庚の『金文編』では、凡例の最後で、

「此の書で収録したのは一千八百九十四字、重文（文字としては、意味が全く同じであるが、書体が異なるもの）一万三千九百五十字、付録一千一百九十九字、重文九百八十五字」

とある。また『金文續編』では、

「此の書に収められた字は九百五十一字、重文六千零八十四字、付録三十三字、重文十四字」

となつてゐる。ただし銘文のある青銅彝器は近年特に文革期以降数多く発掘されているので、弁別認識されている金文の数も、現代では相当多くなつてゐるものと思われる。

## 五 中国古代辞書簡史

それでは古代中国では何時の時代にどのような辞書が編纂されてきたかを見ておくことは、漢字が漢代に使われていた状況を知するには大いに参考になるであろう。

中国史上で最も早く編纂された認識される字書は『史籀篇』である。此の書は、『漢書』『芸文志』に、

「史籀篇者、周時史官教學童書也、與孔子壁中古文異体。（史籀篇は、周時の史官學童に教ふる書なり、孔子壁中の古文とは体を異にす。）」

とある。また許慎の『説文解字叙』にも、

「及宣王太史籀、著大篆十五編、與古文或異（宣王に及びて太史籀、大篆十五編を著す、古文と或いは異なれり）」

とある。この史籀と言う名称について、段注は、

「太史、官名、籀、人名也、省言之曰史籀（太史は官名、籀は人名なり、省いてこれを言ふに史籀と曰ふ）」

と云っている。つまり『史籀篇』は、周の宣王の時代というのであるから、周の第十二代の王で紀元前八二八年から七八二年の間で、まだ十分金文の時代である。『史籀編』は『漢書』に、

「教學童書」とあるが、其れは『漢書』を編纂した班固や、『説文解字』の許慎の後漢の時代からはそう思われたのかも知れないが、西周という時代では、史官になることを目指す学童ばかりでなく、一般の士大夫も必要とした書であったであろう。

次に、秦の始皇帝の時代に李斯が編纂したと言われる『倉頡篇』七章がある。これも『漢書』『芸文志』に、

「漢興、閭里書師、合倉頡・爰歴・博学三篇、斷六十字以爲一章、凡五十五章、并爲倉頡篇（漢興り、閭里の書師、倉頡・爰歴・博学の三篇を合せて、六十字を斷じて一章と爲し、凡そ五十五章、并せて倉頡篇と爲す）」

とある。倉頡（一に蒼頡とも書す）とは、『説文序』に、

「黃帝之史倉頡、見鳥獸蹏迹之跡、知分理之可相別異也、初造書契（黃帝の史倉頡、鳥獸蹏迹の跡を見、分理の相い別異することの可なるを知るなり、初めて書契を造る）」

とある倉頡である。『爰歴』とは、『漢書』『芸文志』の顔師古の注に、

「爰歴六章、車府令趙高作（爰歴六章は、車府令の趙高作る）」

とあるそれであり、『博学』とは、同じく、

「博學七章、太史令胡母敬作（博學七章は、太史令の胡母敬が作る）」

とある。これ等三篇を合わせて『三倉』と称し、全部で三千三百字あり、小篆で書かれていたという。

『漢書』『芸文志』は続けて、

「武帝時司馬相如作凡將篇、無復字。元帝時黃門令史游作急就篇、成帝時將作大匠李長作元尚篇、皆倉頡中正字也。凡將則頗有出異矣。至元始中、徵天下通小學者以百數、各令記字於庭中。揚雄取其有用者以作訓纂篇、順續倉頡、又易倉頡中重複之字、凡八十九章。臣復續揚雄作十（三）章、凡一百二章、無復字、六藝群書所載略備矣。倉頡多古字、俗師失其讀、宣帝時徵齊人能正讀者、張敞從受之、傳至外孫之子杜林、爲作訓故、并列焉。（武帝の時司馬相如凡將篇を作り、復字無し。元帝の時黃門令史游急就篇、成帝の時將作大匠李長元尚篇を作り、皆倉頡の中の正字なり。凡將則頗る異に出る有るなり。元始中に至りて、天下の小學に通じたる者百を以て數え、各々庭中に字を記さしめる。揚雄は其の有用なる者を取りて以て訓纂篇を作り、順じて倉頡に續き、又倉頡の中の重複の字を易へ、凡そ八十九章。臣復た揚雄に續き十三章を作り、凡そ一百二章、復字無く、六藝の群書の載せる所略ぼ備ふなり。倉頡古字多く、俗師其の讀を失ひ、宣帝の時齊の人の能く正讀する者を徵するに、張敞從ひてこれを受け、傳へて外孫の子杜林に至り、爲して訓故を作り、并せて列するなり。）」

と記している。

上記引用文の五行目の「臣」について、韋昭の注に、

「臣、班固自謂也。作十三章、後人不別、疑在倉頡下篇三十四章中（臣とは、班固自ら謂ふなり。十三章を作るも、後人別せず、疑ふらくは倉頡の下篇三十四章の中に在るか）」とある。

以上の記述の中から面白いことが明らかになってくる。其れは、漢代における字書の編纂には作賦者達がかなり深く関わっているということである。つまり前漢期における最も有名な作賦者、司馬相如が『凡將篇』と言う字書をつくり、兩漢に互つて活躍した楊雄が『倉頡訓纂篇』と言う字書を作り、更に楊雄は、『方言』という極めて優れた字書、辞書も作っている。そして後漢の班固は楊雄の後をついで十三章を作り上げたというのである。実はこの班固と略同じ世代、和帝の時に賈逵が『滂喜篇』を編集している。

晋人は五十五章の『倉頡篇』を上巻とし、楊雄の『倉頡訓纂篇』を中巻とし、賈逵の『滂喜篇』を下巻として、これ等を合わせて『三倉』といったのである。

また先に引用した「芸文志」に有るように、実はこれ以前前漢の元帝の時に、黃門令史游が非常に特異な辞書、物名と人の姓を羅列し解釈した『急就篇』を編纂したと言われている。

以上のような歴史的状況を踏まえつつ、以上のような環境の中で『説文解字』は作られたのである。

さて、そこで何故文字学者でもない作賦者達がここまで字書編纂に関わらねばならなかったのか。其れを少し考えて見たいと思うのである。

## 六 司馬相如の作品と古字書の関係

司馬相如の賦の作品には、それまでの中国文学の作品には余り見られない文字が多く使われている。

ただそうした認識を得るにも実は大きな問題が有る。其れは言うまでもないことなのであるが、テキストの問題である。例えば司馬相如が賦を書いたとき、其れは一体何に書いたものであろうか。前稿でも触れたように、蔡倫による中国での紙の発明は、大体後漢の半ば、二世紀初のこととされている。司馬相如は紀元前二世紀の人であるから、その頃まだ紙は世に出ていなかったと思われる。ならば書かれた材は恐らく竹簡か木簡か、或いは彼は後には武帝近くに仕えていたようであるから、その頃には帛布を用いるようになったかもしれないが、『子虚賦』や『上林賦』を書いた初期の頃は恐らく、竹簡か木簡であつたであらう。そうすると司馬相如が実際に最初に使った文字がどのような文字であつたのかは、新たにその原本の竹木簡でも発掘されない限り、いまや知る由もない。

しかしただ解からないだけでは前進することが出来ないもので、ここでは一応、四部叢刊本の版本『文選』を参考してみた。

ただこの拙文では文献上の「文字」を調べてみる必要があるのであるが、甲骨文字や金文などの源資料、或いはその影印本を見ることが出来るものはいいが、それ以外は総て、影印とは言つても、宋代以降作られた版本の影印である。それに同じ四部叢刊本でも、例えば同じ司馬相如の『子虚賦』『上林賦』であつても、『文選』に採られているのと『漢書・司馬相如傳』に採られた

『子虚賦』や『上林賦』ではその用字には微妙な違いがある。と言うことは、近代以降出版された多くの排印本では、底本として何を使つたかによつてそれぞれ用字が違つていのである。まして現在の中国排印本は、多くが簡体字を使つているので、原本に近づくことさえ困難である。

今のところ四部叢刊本の『文選』に採られたものが最も古体を残していると言う根拠も確信も全く無いが、版本或いはその影印本としては一応比較的手に入りやすく古体を残しているのではないかと思われるので、ここでは其れを使用したというわけである。

## 七 『子虚賦』『上林賦』の用字調査

賦に使われている漢字の状況を大雑把にであつても、ある程度認識するために此処に『子虚賦』杜『上林賦』の中から、余り他では見られない字をいくつか取り出して、『説文解字』、甲骨文、金文、木竹簡、帛書、『爾雅』等の中で使われているかどうかを調べてみることにする。

以下の調査が極めて不十分なものであると言うことは重々承知している。

① 『甲骨文編』に採られている文字が甲骨文字の総てではない。特に此処に収録されている文字は飽くまで卜辭に使われた文字であり、或いは当時卜辭以外にも文字が使われていたかもしれない。今は残存していないが、或いは土器や磁器木片などに卜辭以外の目的のための詞語が記述されていたかもしれない。今其れを知る手立ては無い。

②『金文編』が世に出てから既に半世紀以上たっている。この間多くの、銘文のある青銅器が発掘され、発見もされた。特に一九六〇年代半ば以降、所謂文化大革命時期には多くの新出青銅器が加わった。又『金文編』には『金文統編』もあつて、一九三五年に商務印書館から印行されている。そうしたものは今ここには加えなかった。次の機会を待ちたい。

③『睡虎地秦簡』は一九七五年末に湖北省雲夢の地出発掘されたもので、「編年記」「日書」のほか方術関係、数学法律関係などの文書が中心で、余り文学性のある文献は含まれていない。

④『馬王堆帛書』は、一九七二年に一号墓が発掘されたのであるが、重要なことはこの墓が前漢の墓であるということ、つまり許慎の『説文解字』以前の文字を知ることができるということである。それにこのときの出土文書には、『周易』『老子』『黄帝書』『經法』『五十二病方』『相馬經』『五星占』等、多方面に互る内容の文書が含まれていたため、文字の実態を見るには、非常に重要な手がかりを与えてくれているのであるが、これ等も残念ながら漢賦とつき合わせて見るには余り文学的なものではないと言わねばならないであろう。

等など、不備な点は多くあるが、時間と労力の関係で、『爾雅』や『広雅』『釈名』、或は更に揚雄の『方言』の用字等と比較することが出来れば更によかったと思われる。しかし今回は不完全ながらとりあえず手じかにある甲骨文、金文、兩漢の字書類との比較を試みてみた。



(一)

子虚賦

以下に掲げた調査表で、右端の文字はつぎの各本の略称として用いた。

「説」――『説文解字』「宋本説文解字 続古逸叢書之四」

(上海涵 楼拋日本岩崎氏静嘉堂藏本影印)

「甲」――『甲骨文編』中国科学院考古研究所編集 一九六五年中華書局出版

「金」――『金文編』容庚 一九六八年中文出版社

「睡」――『睡虎地秦簡文字編』張守中 一九九四年文物出版社

「馬」――『馬王堆簡帛文字編』陳松長 二〇〇一年文物出版社

「銀」――『銀雀山漢簡文字編』駢宇騫 二〇〇一年文物出版社

「郭」――『郭店楚簡文字編』張守中 張小滄 郝建文 二〇〇〇年文物出版社

「木」――『木簡字典』佐野光一 昭和六十年 雄山閣出版

「爾」――『爾雅』四部叢刊本(版本影印)

( ) の中の一字のものは別体字として存在しているもの。

( ) の中の二字のものは連綿字として使用されているものである。

第三欄の×はその書に存在していないことを表わし、○はその書に存在していることを表わしている。

	玫 (玫)	瑰	琳	璿 (璿)	(琨) 昆	(瑁) 吾	瑛	玳	瑠	琅	瑋
	(玫瑰)		(琳璿)		(琨瑁 美石名)	(瑛)		(玳瑁)		(琅邪)	(瑋瑋)
説甲金睡馬銀郭木爾	玫	○	○	○	○	×	玲	×	×	○	×
	×	×	×	×	×	×	は	×	×	×	×
	玫	×	×	×	×	×	説	×	×	×	×
	×	×	×	×	×	×	文	×	×	×	×
	×	×	×	×	×	×	の	×	×	×	×
	×	×	×	×	×	×	み	×	×	×	×
	×	×	×	×	×	×		×	×	×	×
	○	○	×	×	×	×		○	×	×	○
	○		×	×	×	×		○	×	×	○

	礧	礧	砮	砮	礧	
		(礧礧)		(砮砮)	(礧石)	
	礧	○	×	×	○	說甲金睡馬銀郭木爾
	×	×	×	×	×	
	×	×	×	×	×	
	×	×	×	×	×	
	×	×	×	×	×	
	×	×	×	×	×	
	×	隸	×	×	×	

荔	苞	柎	葳	苴	巴 (芭)	蕪	蘼	薺	苳	蒲	菖	薊	芎	苽	蘭	蘅	蕙	
					(巴苴)		(蘼蕪)		(苳薺)		(菖蒲)		(芎薊)	(苽蒲)	(苽若)	(蘅蘭)	(蕙圃)	
○	○	×	○	○	⊖	○	×	○	×	○	×	○	⊖	○	○	×	×	說甲
×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×		金
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×		睡
○	○	×	×	×	×	×	⊖	×	×	○	×	×	×	⊖		×		馬
×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	⊖		×	×	銀
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×		×		郭
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×		木
×	○	×	×	○	⊖	×	×	×	×	○	×	×	×	⊖				爾
×	○	○	○	×	×	○	○	×	×	○	×	×	×	○	○		×	

菱	芙	(芋)	藺	菴	蘆	菰	藕	蓮	(葫)	藺	葭	蒹	苕	藏	蘋	莎	薜	
(菱華)	(芙蓉)	(軒于)		(菴藺)		(菰蘆)									(青蘋)		(薜莎)	
○	×	○	×	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	說
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	甲
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	金
×	○	○	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	睡
×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	馬
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	銀
×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×	○	蘋	○	○	郭
○	○	×	×	×	○	○	○	×	○	○	○	×	×	○	×	○	○	木
																		爾

																		說
																		甲
																		金
																		睡
																		馬
																		銀
																		郭
																		木
																		爾

梗	枏	樟	桂	椒	檠	楊	檀	梨	栲	橘	柚	榎 (柾)	樅	榜
(梗枏)	(豫樟)	(桂椒)	(檠離)	(朱楊)	(檀梨)	(栲栗)					(旌榎)	(榜人)		
說	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
甲	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
金	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×
睡	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
馬	×	×	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×
銀	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
郭	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
木	×	×	○	×	×	×	×	○	×	○	○	×	○	×
爾	×	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×

	鵠	鷓	鷺	鴛	鵠	鷺	駿	鷺	鷓	鵠
	(文鵠)	(雙鷓)	(鴛鴦)	(白鵠)		(駿鷺)	(孔鷺)		(鷓鷓)	
說甲	○	○	×	○	○	○	○	○	×	說甲
金	×	×	×	×	×	×	×	×	×	金
睡	×	×	×	×	×	×	×	×	×	睡
馬	×	×	×	○	×	×	×	×	×	馬
銀	×	×	×	×	×	×	×	×	×	銀
郭	×	×	×	×	×	×	×	×	×	郭
木	×	×	○	○	×	○	○	×	○	木
爾	×	○	○	×	×	×	×	○	×	爾

蜚 蛭 蛇 蝮 蛟					
(蜚 蛭) (蛇 蝮) (蛇 蝮) (蛟 蝮)					
○	○	×	×	○	説 甲 金 睡 馬 銀 木 爾
×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	
○	×	×	×	○	
○	×	×	×	×	
○	×	×	○	○	
○	×	○	○	×	

驂 騁 馳 駭 騏 駼 駟 駟 駟 駟 駟 駟												
(驂 乘) (駟 駟) (駟 駟)												
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	説 甲 金 睡 馬 銀 木 爾
×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	
×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	
○	○	○	×	×	×	×	○	×	×	○	○	
×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	
○	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	
×	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×	×	

	嬋 (嬋)	嬋 (嬋)	姬 (姫)	娥 (娥)	
		(嬋 嬋)	(晏 姫)	(娥 阿)	
	○ × × × × × × × ×	○ × × × × × × × ×	○ ○ × × × × ○ × ×	○ × × × × × × × ×	説 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾

猗 犴	羆	陁 陀 陂	麟 麋	麟 轆 軼	
○ × × × × × × ○	× × × ○ × × × × ○	× × × × × × × × ○ ○	○ × × × × × × ○ ○	○ × × × × × × × ○	説 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾

徨 傍 纒 繖 繞 繆 縐 縠 縞 紵 絳 翔 翽 (翽) 徊 律														
(繆繞) (縐縐) (霧縠) (紵縞) (阿絳) (翽翽) (律徊)														
×	○	○	縐	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	說 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	○	○	○	×	○	×	×	×	○	×	×	
×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	○	○	○	○	

蕤 縱 霆 罕 敦 髥 髣 褰 袞 粉											
(敦罕) (髣髥) (褰積) (粉袞)											
○	×	○	○	𠂔	○	×	○	褰	○	說 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
×	○	×	×	𠂔	×	×	×	×	×		
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
×	×	○	○	×	○	○	×	×	×		



(二)

上林賦

以下に掲げた調査表で、右端の文字はつぎの各本の略称として用いた。

「説」――『説文解字』「宋本説文解字 続古逸叢書之四」

(上海涵 楼拋日本岩崎氏静嘉堂藏本影印)

「甲」――『甲骨文編』中国科学院考古研究所編集 一九六五年中華書局出版

「金」――『金文編』容庚 一九六八年中文出版社

「睡」――『睡虎地秦簡文字編』張守中 一九九四年文物出版社

「馬」――『馬王堆簡帛文字編』陳松長 二〇〇一年文物出版社

「銀」――『銀雀山漢簡文字編』駢宇騫 二〇〇一年文物出版社

「郭」――『郭店楚簡文字編』張守中 張小滄 郝建文 二〇〇〇年文物出版社

「木」――『木簡字典』佐野光一 昭和六十年 雄山閣出版

「爾」――『爾雅』四部叢刊本(版本影印)

( ) の中の一字のものは別体字として存在しているもの。

( ) の中の二字のものは連綿字として使用されているものである。

第三欄の×はその書に存在していないことを表わし、○はその書に存在していることを表わしている。

	嶸	崢	嶸 (窠)	嶸	
		(崢 嶸)		(嶸 嶸)	
	○	崢	×	×	說
	×	×	×	×	甲
	×	×	×	×	金
	×	×	×	×	睡
	×	×	×	×	馬
	×	×	×	×	銀
	×	×	×	×	郭
	×	崢	×	×	木
	×	×	×	×	爾

琰琬瑕玢珉瑚珊 (珊)							
(琬琰) (赤瑕) (玢璠) (珉玉) (珊瑚)							
○	○	○	×	○	○	○	說 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	練 翬	居 延	×	×	練 翬	×	
×							

磧磷砢磊磅砵							
(磧歷) (磊砢) (砵磅)							
○	○	○	○	×	×		說 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾
×	○	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	○	×	○	×	×	×	
×							

藐	藝	苔	苙	萸	倭	芴	苳	菱	菲	蔓	苧	蓀	葳	蘘	薑	苳	菁	
(縣藐)		(苔逕)	(瀏苙)	(萸棣)	(倭櫛)	(軋芴)	(苳苳)	(晻菱)	(菲菲)	(延蔓)	(蔣苧)	(若蓀)	(葳橙)	(蘘荷)		(苳薑)	(菁藻)	
×	○	○	隸	○	○	○	○	×	○	○	×	×	○	○	彊	○	○	說
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	甲
×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	金
×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	睡
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	馬
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	銀
○	○	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	○	○	郭
○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×	○	×	木
																		爾

楓	櫛	櫟	机	棣	朴	柰	檉	檣	杷	枇	棧	橙	楯	捫	檫	櫛	檣		
				(萸棣)	(厚朴)		(檉柰)	(檣栳)		(枇杷)			(楯軒)			(步櫛)	(華檣)		
○	×	○	×	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○			○	×	○	說 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	
×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	
×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	
×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	○	×	×	×			×	×	○	
×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	
×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×			×	×	○	
○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	

橈	杪	欂	櫨	櫓	櫨	杙	
(柔橈)	(杪顛)	(欂危)	(菱櫨)	(櫓檀)			
○	○	×	○	×	○	○	説 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	○	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
○	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
○	×	×	○	○	○	×	
×	×	×	○	○	×	×	

鳩	鵲	鵲	鳩	鵲	鳩	鵲	
(鳩鵲)	(鵲蘇)		(鳩盧)	(煩鵲)			
⊗	○	×	○	○	×	○	説 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	○	○	×	×	

[illegible]

沆	漚	滂	洌	澈	滌	泌	汨	洵	潏	決	淤	蕩	渭	涇	漣	潏	漚	
(沆漚)	(滂漚)	(澈洌)	(泌滌)	(汨汨)	(洵涌)	(決潏)							(涇渭)	(漣漣)				
○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○		○	○	○	○	○	○
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×	×	×	○
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	○	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×	×	×	○
×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×	○	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×	×	×	×
×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×		×	×	×	×	○	○

說甲金睡馬銀郭木爾

澹	滄	漭	漾	潰	漾	灝	滙	漑	滄	滄	滄	滄	滄	滄	滄	滄	滄	滄
(澹滄)	(滄滄)	(潰滄)	(灝滄)	(滙滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)	(滄滄)
○	×	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×
×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○			

說甲金睡馬銀郭木爾

瀏 泣 澤 湃 漚 涉 濩 沅 涑								
(瀏泣) (泣泣) (澤弗) (澎湃) (漚) (涉) (濩) (沅) (涑)								
×	○	×	×	○	○	○	×	説 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾
×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	○	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	○	×	○	
×	×	×	×	×	○	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	○	

騾 驢 騃 駮 駮 驢						
(驢驢) (駮騃) (驢駮)						
○	○	○	○	○	○	説 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾
×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	
×	×	○	○	×	×	
×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	
×	○	×	×	×	×	



豸	𧈧	𧈨	𧈩	𧈪	𧈫	𧈬	𧈭	𧈮	𧈯	𧈰	𧈱	𧈲	𧈳	𧈴	𧈵	𧈶	𧈷	𧈸	𧈹	𧈺	𧈻	𧈼	𧈽	𧈾	𧈿	𧉀	𧉁	𧉂	𧉃	𧉄	𧉅	𧉆	𧉇	𧉈	𧉉	𧉊	𧉋	𧉌	𧉍	𧉎	𧉏	𧉐	𧉑	𧉒	𧉓	𧉔	𧉕	𧉖	𧉗	𧉘	𧉙	𧉚	𧉛	𧉜	𧉝	𧉞	𧉟	𧉠	𧉡	𧉢	𧉣	𧉤	𧉥	𧉦	𧉧	𧉨	𧉩	𧉪	𧉫	𧉬	𧉭	𧉮	𧉯	𧉰	𧉱	𧉲	𧉳	𧉴	𧉵	𧉶	𧉷	𧉸	𧉹	𧉺	𧉻	𧉼	𧉽	𧉾	𧉿	𧊀	𧊁	𧊂	𧊃	𧊄	𧊅	𧊆	𧊇	𧊈	𧊉	𧊊	𧊋	𧊌	𧊍	𧊎	𧊏	𧊐	𧊑	𧊒	𧊓	𧊔	𧊕	𧊖	𧊗	𧊘	𧊙	𧊚	𧊛	𧊜	𧊝	𧊞	𧊟	𧊠	𧊡	𧊢	𧊣	𧊤	𧊥	𧊦	𧊧	𧊨	𧊩	𧊪	𧊫	𧊬	𧊭	𧊮	𧊯	𧊰	𧊱	𧊲	𧊳	𧊴	𧊵	𧊶	𧊷	𧊸	𧊹	𧊺	𧊻	𧊼	𧊽	𧊾	𧊿	𧋀	𧋁	𧋂	𧋃	𧋄	𧋅	𧋆	𧋇	𧋈	𧋉	𧋊	𧋋	𧋌	𧋍	𧋎	𧋏	𧋐	𧋑	𧋒	𧋓	𧋔	𧋕	𧋖	𧋗	𧋘	𧋙	𧋚	𧋛	𧋜	𧋝	𧋞	𧋟	𧋠	𧋡	𧋢	𧋣	𧋤	𧋥	𧋦	𧋧	𧋨	𧋩	𧋪	𧋫	𧋬	𧋭	𧋮	𧋯	𧋰	𧋱	𧋲	𧋳	𧋴	𧋵	𧋶	𧋷	𧋸	𧋹	𧋺	𧋻	𧋼	𧋽	𧋾	𧋿	𧌀	𧌁	𧌂	𧌃	𧌄	𧌅	𧌆	𧌇	𧌈	𧌉	𧌊	𧌋	𧌌	𧌍	𧌎	𧌏	𧌐	𧌑	𧌒	𧌓	𧌔	𧌕	𧌖	𧌗	𧌘	𧌙	𧌚	𧌛	𧌜	𧌝	𧌞	𧌟	𧌠	𧌡	𧌢	𧌣	𧌤	𧌥	𧌦	𧌧	𧌨	𧌩	𧌪	𧌫	𧌬	𧌭	𧌮	𧌯	𧌰	𧌱	𧌲	𧌳	𧌴	𧌵	𧌶	𧌷	𧌸	𧌹	𧌺	𧌻	𧌼	𧌽	𧌾	𧌿	𧍀	𧍁	𧍂	𧍃	𧍄	𧍅	𧍆	𧍇	𧍈	𧍉	𧍊	𧍋	𧍌	𧍍	𧍎	𧍏	𧍐	𧍑	𧍒	𧍓	𧍔	𧍕	𧍖	𧍗	𧍘	𧍙	𧍚	𧍛	𧍜	𧍝	𧍞	𧍟	𧍠	𧍡	𧍢	𧍣	𧍤	𧍥	𧍦	𧍧	𧍨	𧍩	𧍪	𧍫	𧍬	𧍭	𧍮	𧍯	𧍰	𧍱	𧍲	𧍳	𧍴	𧍵	𧍶	𧍷	𧍸	𧍹	𧍺	𧍻	𧍼	𧍽	𧍾	𧍿	𧎀	𧎁	𧎂	𧎃	𧎄	𧎅	𧎆	𧎇	𧎈	𧎉	𧎊	𧎋	𧎌	𧎍	𧎎	𧎏	𧎐	𧎑	𧎒	𧎓	𧎔	𧎕	𧎖	𧎗	𧎘	𧎙	𧎚	𧎛	𧎜	𧎝	𧎞	𧎟	𧎠	𧎡	𧎢	𧎣	𧎤	𧎥	𧎦	𧎧	𧎨	𧎩	𧎪	𧎫	𧎬	𧎭	𧎮	𧎯	𧎰	𧎱	𧎲	𧎳	𧎴	𧎵	𧎶	𧎷	𧎸	𧎹	𧎺	𧎻	𧎼	𧎽	𧎾	𧎿	𧏀	𧏁	𧏂	𧏃	𧏄	𧏅	𧏆	𧏇	𧏈	𧏉	𧏊	𧏋	𧏌	𧏍	𧏎	𧏏	𧏐	𧏑	𧏒	𧏓	𧏔	𧏕	𧏖	𧏗	𧏘	𧏙	𧏚	𧏛	𧏜	𧏝	𧏞	𧏟	𧏠	𧏡	𧏢	𧏣	𧏤	𧏥	𧏦	𧏧	𧏨	𧏩	𧏪	𧏫																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								

問	飢	爰	仝	偃	俚	闔	閨	突	麒	塵	羣	獮	獮	縝	唎	唎	胎
(問 何)	(爰 飢)	(偃 仝)	(婉 俚)			(閨 闔)	(巖 突)	(麒 麟)	(塵 麋)		(獮 羣)	(獮 旄)	(縝 紛)	(唎 茆)	(唎 夢)	(胎 蠻)	
○ × × × ○ × × ×	× × × × × × × ○	○ × × × ○ × × ×	○ × × × × × × ×	○ × × × × × × ×	○ × × × × × × ○	× × × × × × ○ ○	× × × × ○ × × ○	○ × × × × × × ×	○ × × × × × × ○	○ × × × × × × ×	羣 <sub>○</sub> × × × × × × ○	○ <sub>○</sub> × × × × × × ×	× × × × × × × ×	× × × × × × × ×	× × × × × × × ×	○ × × × × × × ×	
說甲金睡馬銀郭木爾																	

躡 殢 𨔵 𨔶 𨔷 𨔸 𨔹 𨔺 𨔻 𨔼 𨔽 𨔾 𨔿 𨕀 𨕁 𨕂 𨕃 𨕄	
(𨔹𨔺) (𨔻𨔼) (𨔽𨔾) (𨔿𨕀) (𨕁𨕂)	
× ○ 𨔵 ○ × 𨔺 × ○ ○ ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × ○ × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × ○ × × × × ○ ○ × × × × × × × × × × × × × × ○ × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × ○ × ○ × × × ○ × ○ × × × × × ○ × ×	說 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾

𨔵 𨔶 𨔷 𨔸 𨔹 𨔺 𨔻 𨔼 𨔽 𨔾 𨔿 𨕀 𨕁 𨕂 𨕃 𨕄 𨕅 𨕆 𨕇	
(𨔵𨔶) (𨔷𨔸) (𨔹𨔺) (𨔻𨔼) (𨔽𨔾) (𨔿𨕀) (𨕁𨕂)	
× ○ ○ 𨔸 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 𨔿 × ○ × × ○ ○ × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × × ○ × × × × × ○ × ○ × × ○ × × ○ ×	說 甲 金 睡 馬 銀 郭 木 爾

## 八 司馬相如と『説文解字』

こうして見てくると『説文』に見当たらない多くの文字を相如は使っていることが解かる。それでは許慎は相如の作品を見ることは無かったのかというと、実はそうではない。なぜならば『説文解字』の字解に、許慎は十数回に亘って「司馬相如説」を引用しているからである。例えば「」字の条に、

「𦰇營𦰇、香艸也、从艸宮聲、𦰇司馬相如説、營或从弓（𦰇營𦰇は香草なり、艸に从ひ宮聲、𦰇司馬相如説く、營或ひは弓に从ふ）」

とあり、また「𦰇」字の条に、

「𦰇𦰇也、从艸、𦰇聲、楚謂之𦰇、秦謂之𦰇、𦰇司馬相如説、𦰇从𦰇（𦰇𦰇なり、艸に从ひ、𦰇聲、楚は之を𦰇と謂ひ、秦は之を𦰇と謂ふ、𦰇司馬相如説く、𦰇は𦰇に从ふと）」

ある。また「𦰇」字の条には、

「𦰇𦰇也、五方神鳥也、東方發明、南方焦明、西方𦰇𦰇、北方幽昌、中央鳳皇、从鳥、𦰇聲、𦰇司馬相如説、从𦰇聲、（𦰇𦰇なり、五方の神鳥なり、東方は發明、南方は焦明、西方は𦰇𦰇、北方は幽昌、中央は鳳皇、鳥に从ひ、𦰇聲、𦰇は司馬相如説く、𦰇に从ひ聲も、）」

ともある。またこのほか「𦰇」字の条、「𦰇」字の条などにも司馬相如説を引いているのを見ることが出来るからである。にも拘らず『子虚賦』では約三十五字が『説文』に採られていない。『上林賦』では、二百二十九字拾い出した中で、『説文』に採られていないのは七十三字あった。そのあたりの特徴を挙げてみると、

- ① 山冠の字では、二十九字の内、十四字が『説文』に採られていない。二字で双声連綿字を構成しながら、そのうちの一字しか採られていないものもある。
- ② 玉偏の字では、十九字の内、四字が採られていないだけで、それ以外は総て『説文』に採られている。玉は古代中国に於いては重要な裝飾材料であり、財産であり、象徴品であったので、それだけ多く使われていたために、それらを表す文字もかなり完備していたと言うことも知れない。
- ③ 石偏の字は、十一字の内、採られていないのは四字だけである。古代の建築物、建造物には多くの石類が使われていたであろうから、特殊なものだけが文字としては表現されていなかったのであろう。
- ④ 草冠の字では、五十四字の内、採られていないのは十三字のみである。所謂「草本」は、日常生活に身近に多く使われていたであろう。食料、衣糧、医療、香料など。そのため自然物の中では、人々にとって最も親しみの持てる物品であったに違いない。そのため身近にある草のほとんどには名があり、其れを表す文字も用意されていたのであろう。
- ⑤ 木偏の字では、四十二字の内、『説文』に採られていないのは十一字のみである。これに就いては草冠の字の場合と略

同じことが言えるであろうが、日常の生活上では、木材は、草よりもその用途の範囲は広がったであろう。食料、衣料など以外に、建築材料や家具調度品の製作には欠かせなかったであろうから、これもやはり特殊な材以外は総て一般にも周知されていたに違いない。またそれらの交易量も当然多数に上ったであろうから、当然それらを表す文字も略完備していたはずである。

⑥ 鳥偏の字は、十七字の内、五字が採られていなかった。鳥も食料、衣料などに欠かせない物品であつたばかりで無く、文芸上の雅語としても欠かせなかったに違いない。

⑦ 虫偏の字は、本来少なく二十字であるが、そのうちの五字が『説文』にはない。日常ではあまり馴染みが無かつたのであろう。

⑧ 馬偏の字は十九字を取り出してみたが、『説文』に無かつたのは、ただ一字のみで、そのほかの総てが許慎の手の内に有つたということである。馬は古代人から近代人にいたるまで重要な交通手段であり、運搬手段であつたことを考えると、これも当然であつたであらう。

⑨ 女偏の字は十文字取り出したが、これらは皆『説文』にある字である。更にこれ等は何らかの物品の名前というよりも、表現上の形容語である場合が多い。恐らく当時の文人たちの、文芸常用語であつたのであらう。

⑩ 糸偏の字は十字抜き出したがこれも総て『説文』に採られている。これ等は衣類に関する物品名や衣類に関する形容表現語である。衣類はこれなくして日常の生活は考えられなかつたであらう。

⑪ 三水偏の字は、『上林賦』のみから四十四字取り出したのであるが、此の内十三字が『説文』には無かつた。『説文』の三水偏の字は多くが地方を含めた各河川の固有の名である。河川は中国大陸内陸部では極めて重要な生活条件である。それだけに重要視されていたのであらう。

⑫ 魚偏の字であるが、これも『上林賦』からのみ採つたのであるが、九字ある。此の内二字が『説文』には無かつた。中国大陸の中で都が置かれたのはみんな内陸部である。そのあたりの魚類は総て淡水魚である。『説文』の魚偏の字は、魚の名前というよりも、魚の部分を表す字が多い。

(此処に掲げた調査の結果表は新たな発掘甲骨片や有銘文青銅器、木簡竹簡の類が、出現したとき或いは、又少し時間が執れたときに、『方言』『釈名』『集韻』『廣雅』等とともに再度調査してみたい。)

## 九 漢代作賦者達と「字典」の関係

この表から解かることは、司馬相如の賦、二作品の中で百字あまりの文字が『説文』にはないということである。司馬相如の作品を見たに違いない許慎が何故そうした文字を自分の作つた字典に入れなかつたのか。尤もこういう疑問は許慎が、当時使われていた文字を全体に互つて把握することが出来るという立場と環境に居たということを前提としてのことであるが、その答えこそが当時の文字環境と、当時の文人たちの対文字認識の鍵となるに違いないと思われる。

そこで考えられることは、突き詰めれば一つであろう。即ち当時の作賦者たちは、当時流通していた以外の漢字を自分達で作りに出したのではないかということである。だからこそ彼らは、彼ら以外には知られていない漢字を他人に知らせ、理解してもらうために、その為にこそ自らの手で「字典」を作る必要があったのではなからうか。

そのために司馬相如は『凡将篇』を、楊雄は『倉頡訓纂篇』を、そして楊雄の後を受けて班固は『十三章』を作ったのである。

『漢書・芸文志』には、

「漢興、蕭何草律、亦著其法、曰、太史試學童、能諷書九千字以上、乃得爲史、以六體試之、課最者以爲尙書御史書令史。吏民上書、字或不正、輒舉劾。六體者、古文、奇字、篆書、隸書、繆篆、蟲書、皆所以通知古今文字、摹印章、書幡信也。（漢興り、蕭何律を草し、また其の法を著して、曰く、太史學童を試みるに、能く書九千字以上を諷すれば、乃ち史と爲るを得る。六體を以てこれを試み、課して最たる者は以て尙書御史書令史と爲す。吏民上書して、字正しからざれば、輒ち擧げて劾す。六體は、古文、奇字、篆書、隸書、繆篆、蟲書、皆以て通じて古今の文字を知り、印章を摹し、幡信を書する所なり。）」

とある。またここに書かれた「六體」についての顔師古の注は、

「古文謂孔子壁中書。奇字卽古文而異者也。篆書謂小篆、蓋秦始皇帝使程邈所作。隸書亦程邈所獻、主於徒隸、從簡易也。繆篆謂其文屈曲纏繞、所以摹印章也。蟲書謂爲蟲鳥之形、所以書幡信也。（古文は孔子の壁中の書を謂ふ。奇字は即ち古文にして異なる者なり。篆書は小篆を謂ひ、蓋し秦の始皇帝の使ひ程邈の作る所なり。隸書は亦た程邈の獻ずる所にして、徒隸に主とし、簡易に従ふなり。繆篆は其の文の屈曲纏繞なるを謂ひ、以て印章を摹する所なり。蟲書は蟲鳥の形を爲すを謂ひ、以て幡信を書する所なり。）」

とある。つまり「奇字」とは六体といわれる書体の一つで、孔子の家の壁の中から出てきた文書に使われていた、所謂「古文」の少し形の変ったものであるというのである。

また『漢書・楊雄傳』に、

「莽聞之曰、雄素不與事、何故在此、問請問其故、乃劉棻嘗從雄學作奇字、雄不知情。有詔勿問。然京師爲之語曰、惟寂寞、自投閣、爰清靜、作符命。（莽これを聞きて曰く、雄素より事に與せず、何故此に在るや、問かに其の故を問ふを請ふ、乃ち劉棻嘗て雄に従ひて奇字を作るを学び、雄情を知らず。問ふ勿れの詔有り。然るに京師之が爲に語りて曰く、惟れ寂寞、自ら閣に投じ、爰に清靜、符命を作る）」

とあり、この「奇字」についての顔師古の注も、

「古文之異者（古文の異なる者）」と有るのみである。

ここで気になるのは実は、「從雄學作奇字」の表現である。

「奇字」は「古文の異なる者」というのは、孔壁の書のこと

あるから、恐らく春秋から戦国期にかけての文字であろう。つまり言い換えれば其れは「籀文」ということであろう。しかし「異なる」とあるからそれとは少し異なっているのである。現代の文字史のうえから言えば、籀文から大篆、大篆から小篆、小篆から秦隸、秦隸から漢隸へとなっていくのであり、その間に「奇字」なる者が入る余地は無いように思われる。特に後世「奇字」が一つの字体として受け継がれていったという痕跡が全く見られないところを見ると、それが一つの字体として定着するような性格のものではなかったようである。そう考えるとここで「作奇字」という表現も些か疑問を感じさせざるを得ない。そこで想像するのであるが、この「奇字」というのは、今までになかった漢字を、その必要に合わせて、「古文」漢字の作られ方に合わせ則って新たに作られた漢字ということではないであろうか。もしそうならば「作奇字」という表現も頷ける。『説文』には、

「奇、異也、一曰不耦（奇は異なり。一に曰く、耦せず）」

とある。つまり「今までの漢字とは異なる字であり、今までの漢字には類しない字」ということである。

些か強引であるが、このように考えると、賦には、『説文』やその他の甲骨文、金文、木簡、竹簡、帛書などに見られない字が数多く使われているのも理解できようというものである。

現代に生きている我々は、書を開けばそこに多くの印刷された漢字が目に入ってくる。

その印刷された漢字の背後には膨大な、用意されている活字を想像することが出来る。パソコンでプリントアウトされた書類も

同じことが言える。パソコンという無限の用途を持っているマジックボックスのようなものの中にも、漢字ボックスがあつて、其の中には限られてはいるが膨大な量の漢字が用意されているのである。それらを駆使すればどんなものでも表現することが出来るはずである。特に日本の場合には漢字以外に、カタカナやひらがなもあるから、古来日本には無かった物名や概念、西洋渡りの本来ラテン文字やローマ字で表記されなければならないようなものであつても、其の意味内容はともかく、表記だけなら、極めて簡単に表記することが出来る。しかし所謂漢字しか持たない中国の場合はなかなかそうはいかない。例えばスポーツ種目のピンポンを表すのに奇妙な文字を作り出したり、特に現代の若者や女性のファッションを表すためにそれこそ珍妙な文字が作られ使われているのを時々目にする。其の多くは洋風の音標表現として使っているのである。このようなところにも漢民族の文字に対する、日本人とは異なる観念を見て取ることが出来るのである。つまり新しい物品や概念に対する表現文字の有無が日本での漢字表現のように絶対的、固定的には考えられてはいないのである。

即ち司馬相如や、或いは楊雄の時代であつては、新しい物名や観念概念、様態表現がそれこそ漢字の有無として固定していたわけではないのである。それまでに用意されていた漢字だけでは、其の時代としての新しい物品にしろ概念にしろ、様態の表現にしろ到底表しきれなかったはずである。

つまり此の時代、漢という時代、特に前漢という時代は、それが物品であれ、概念であれ、新しいものを表現すると言うことは、新しく文字を作ると言うことと重なっている部分が多々あつたはずである。

即ち、「奇字」とか「奇字を作る」というのはそういうことを意味していたのである。各物品・様態に当てる漢字の存在が固定化・確定化し始めるのは恐らく『説文解字』以後の事であろう。

『漢書』によると「奇字を作る」名人は揚雄であつたらしい。揚雄が活躍した時代と、司馬相如が活躍した時代とは、凡そ二百年弱の差がある。奇字が作られ始めたのは、恐らく前漢の初めぐらいからであろう。当時、司馬相如等の時代には奇字などという表現も無かつたに違いない。それが揚雄の時代に至つて尤も盛んに使われるようになったものと思われる。

## 結 語

中国古代史の上で文字の出現は、甲骨文字、金文などが尤も早いといわれる。しかし其のときに作られた漢字だけで、それ以降三千年の書写文化発展の用が足りたわけではない。その間に多くの文字が作られ、使用されてきた。後には全くといっていいほど使われなくなつてしまつたが、武則天が作つた文字などは其の最も象徴的なものであろう。文字は其の時代時代の必要に応じて作られてきたのだ。ただ誰が何時どのようにして作つたのかは、武則天以外はほとんど知られていない。日本の所謂「国字」といわれるものも、中国から輸入してきた漢字を使って発展させた書写文化の中で、何時、誰が、そのようにして作つたのかは明らかではないが、日本人が作つた独特の漢字である。つまり日本の「奇字」である。考えてみると、平仮名や片かなも漢字文化の中で、漢字を變形させて生まれたものである。

そういう意味では漢代の司馬相如や揚雄などの多くの作賦家たちは、優れた賦を多く作つたばかりでなく、中国漢字作成史の上でも重要な役割を果たしたといえるのではなからうか。

(二〇〇八年七月十一日掲載決定)